
特 集 I

高大接続のためのワークショップ「サマー・スクール2002」

サマー・スクールの実施による高大接続の 改善に関する基礎的開発研究

村上 隆*・吉田俊和*・的場正美*・柴田好章*
速水敏彦*・金井篤子*・岡田 猛*・西野節男*
大谷 尚*・今津孝次郎*・中田有紀**・羽谷沙織**
山川法子**・内田 良**・酒井亨子**・難波久美子**
坂本 剛**・小池はるか**・三後美紀**・安達仁美**

1. 本研究の目的
 2. 本研究の経緯
 3. サマー・スクールを実施する意味

1. 本研究の目的

本研究は、以下の3点の解明を通して、高校における学びと大学における学びを繋ぐ高大接続のあり方を明らかにすることを目的としている。

- 1) 大学における授業を模したサマー・スクールを実施し、そこに参加した高校生が本学部の学びのあり方をどのように体得するのか、その過程を明らかにする。
- 2) その計画・実施過程にどのような問題があるのかを明らかにする。
- 3) サマー・スクールでの学びが進路決定にどのように影響を与えるのかをアンケート調査を通して明らかにする。

2. 本研究の経緯

本研究の基盤には、科学研究費補助金「高大接続の改善を目指す自薦型 AO 入試の基礎的開発研究」(研究代表：今津孝次郎)がある。4年前に村上隆により学部全体として AO 入試に関する実験研究を実施する構想が立案されたが、教育学部全体の研究ではなく、科学研究費による研究をす

* 大学院教育発達科学研究科
** 大学院教育発達科学研究科博士課程
*** 大学院教育発達科学研究科研究員

ることになった。平成13年度に村上隆が科学研究費の萌芽研究に申請をし、平成14年度に採択され、平成14年度から2年間の研究が始まった。平成14年度、村上隆が研究科長に選出されたこと、COEの申請の組織をしなければならなかったことから、研究代表者は村上隆から今津孝次郎へ交代した。

公布申請後、今津孝次郎の他、共同研究者である村上隆、速水敏彦、吉田俊和、金井篤子、大谷尚、岡田猛、的場正美が集まり、研究の全体構想とサマー・スクールの実施と時期が決定された。サマー・スクールは、教育系と心理系から各2コース、合計4のコースからなり、第1コース「外国の学校について知ろう：学校を手がかりとした国際理解」は西野節男と大谷尚、第2コース「学ぶ立場から教える立場へ：人間形成の場としての授業」は柴田好章、第3コース「観るということ：心理学的なものの見方」は岡田猛、第4コース「人間の行動を考える」は吉田俊和が、それぞれ大学院生を含め立案した。

第2回の研究打合せが開催され、「名古屋大学教育学部 高校生のための サマー・スクール」という名称が確定し、1) 開講時間、2) 募集人員、3) 案内の配布の範囲、4) 実施体制、5) 病気や欠席など緊急時の対応、6) メールアドレスの開設、7) 定員オーバーの時の選別方法、8) 主催の正式名称、9) パンフレットの作成、案内の発送等の分担、10) 高校側からの問い合わせに対する体制、などについて、協議をし、対策を練った。その一例を挙げると、案内の配布の範囲は、大学説明会に参加した実績のある高校とこれまでに本教育学部に入学した高校生の出身高校の中から、3日間の通学に通える距離の範囲内にある高校を選定した。また受講できる高校生は、大学入試の負担を考慮し、2年生に限定した。

7月1日付けで、選定した高校に案内のパンフレットと申し込み用紙を郵送した。参加申込が44名あり、全員の希望動機を数人の教官で精読し、全員を第1コース11名、第2コース12名、第3コース11名、第4コース10名に分けた。参加の可否、及びプログラムの日程と内容、諸連絡事項などを、高校に7月26日までに送付を完了した。

参加者が確定した後、2回に分けて、サマー・スクールを指導する大学院生に対して、サマー・スクールの趣旨、プログラムの内容と日程、参加する高校生への対応、連絡の取り方、アンケートの実施、それにレポート作成の事後指導のあり方と評価の方法について説明し、実施についての具体的問題について打合せた。

サマー・スクール第1日は、10時から開校式とオリエンテーションを行い、直後に事前アンケートを実施した。10時30分から各コースに分かれ、16時まで各コースのスクールが実施された。第2日、第3日とも同じ時間帯でスクールが実施されたが、スクール終了後に中間アンケートが実施され、その後、各コースで終了式が開催され、修了証書が手渡された。終了後に、高校生は去りがたく、指導した大学院生や仲間と記念写真を撮る姿、話をする姿が印象的であった。

参加した高校生には、レポートが課せられていて、そのレポート作成の支援を指導役の大学院生が行った。8月末までに、レポートと事後アンケートが高校生から郵送されてきた。レポートの評価は担当した大学院生によって行われ、本論文に報告されている。

3. サマー・スクールを実施する意味

志の高い優れた資質をもつ学生が本大学の教育内容に興味をもち、自分の適性に合わせて進路決

定をし、高校における学びと大学における学びとを繋ぐことを可能にするためには、大学は幾つかの問題を解明し、解決する必要がある。高校生の関心の喚起、適性の自覚、進路決定、学びの繋ぎという観点から高大接続のあり方を改善するためにサマー・スクールを実施する意味を考えたい。

第1に必要なことは、教育学部・教育発達研究科の理念と使命とこれまでの活動、学部の教育プログラムと内容、教官の研究内容を高校生に多様なルートを通して広報することである。これまでに、学部・大学院の紹介冊子の作成と配布、大学と学部紹介ビデオの作製と公開、大学説明会の開催、ホームページの開設がなされ、本学部は、広報活動に努めてきた。しかしながら、高校生にとっては、本学部でどのようなことを学ぶことになるのか、どのような研究ができる可能性があるのか、それに関するイメージが必ずしも十分に受験前に形成されているわけではない。文学部と本教育学部の心理学との違いや愛知教育大学や岐阜大学教育学部と本教育学部との違いに始まり、取得できる資格、学生生活、卒業論文、授業の方法、そして試験について高校生から質問がなされるように、高校生は、大学に関するより詳しい情報を欲している。大学において実際になされる授業を模したサマー・スクールの実施は、その情報の一部を提供する場であり、高校生にとっては、大学における学びについて具体的なイメージ形成の場になり得る。大学が提供し、期待することと学生が期待するものとの間のミスマッチを回避するためには、大学側からの情報提供と高校生の本教育学部に対する早期のイメージ形成が必要である。

第2には、志の高さと優れた資質を判断する資料の収集である。本教育学部は、これまでに大学入試センター試験と教科の試験であるいわゆる個別試験の他、小論文を導入した後期日程の試験、および3年次からの編入学試験を実施し、教育学部で求められる優れた資質をもつ学生を選抜しようとしてきた。志の高さと優れた資質をどのように判断するのか。まずは、本教育学部においてどのような志と資質を学生に求めるのかということが明確にされる必要がある。その資質と志は本学部の使命と直接に関連してくるし、教育プログラムのあり方とも関係してくる。各大学が法人化を直前にして、中期目標を作成している。その過程で、各大学は、国際社会や地域における大学の存在意義を改めて問い直し、大学像をそれぞれに再構築しつつある。九州大学「21世紀プログラム」のAO選抜は、学生像として、「・問題発見とその解明を目指す自主性、・文系理系にこだわらず幅広く学びたいという学問的関心、・学問を積極的に学びたいという意欲や能力、・政治や社会、歴史や文化、自然に対する一定以上の教養、・語学力を身につけようとする意欲」（武谷，2001，p.16）を挙げている。学生像を明確にした例である。本学部でも、求める学生の資質の質についての問い直しが始まりつつある。これまでに、本研究科・学部は、外部評価、学生による授業評価、高度専門職業人養成コースの修了者へのアンケート調査等により、その資質を明らかにする資料を蓄積してきた。サマー・スクールの実施過程は、どのような資質が必要であるかを発掘する場である。

第3に、選抜方法の開発に伴う実施体制の問題である。選抜方法は、選抜のテストを単に受けるというのではなく、「受験によって新しい体験をえられる」（武谷，2001，p.17）ような配慮（入学後の学修過程と学生の達成評価を模した選抜方法）がなされている。高大の学びの接続という観点からも重要な配慮である。夏休み終了直前に高校生から返却されたレポートの評価は、大学の授業を模したコースの提供がどのように受講生に影響を与えるかという評価はもちろん、コースの内

容とその組織および指導方法を反省する資料となっている。第1コースの場合、日本で学ぶ留学生との出会いやフィールドワークに従事している大学院生の苦労話や発見を聞くことによって、外国の文化や人々を理解する態度について、高校生一人ひとりに考えさせる機会になったと述べている。サマー・スクールが「新しい体験をえられる」場になっている例である。

サマー・スクールを実施する場合には、体制づくりと環境整備が必要である。九州大学のAO入試の第2次選抜は、15分の発表と30分のグループによる討論の後、午後には図書館の閲覧室へ高校生が移動し、閲覧と休憩が自由にできる環境のなかで、3時間半にわたって小論文の作成がなされている（武谷，2001，p.17）。インドネシアからの留学生が参加し、高校生からの質問が積極的になされた第1コースの場合も、情報を持った留学生の存在が有効に働いている。第2コースのように調査や作業を含む場合、図書館の利用とインターネットの利用環境の整備が必要である。

参考文献

武谷俊一（2001）「九州大学『21世紀プログラム』のAO選抜について」『大学入試フォーラム』
No.24.2001年12月。

（的場正美）